

2020年5月3日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「ひとりのひととき」マタイによる福音書14章13節、22～23節

主任牧師 加藤 誠

**「イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。」(マタイ14・13)**

**「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。」(マタイ14・22～23)**

今朝も主イエスに聴いていきましょう。主イエスは、神さまが私たちのために送ってくださった「ラブレーター」です。「聖書」も、神さまからの「ラブレーター」と呼ばれていますが、聖書に証しされている「イエス・キリスト」そのものが、神さまからの「ラブレーター」だと私は思っています。主イエスに聴くと、神さまの愛が見えてきます。一人ひとりを大切に扱い、愛してくださっている、神さまの言葉が聴こえてきます。今週、新しい一週間を始めるにあたって、私たちが生きるための言葉を、主イエスに聴いていきたいのです。

主イエスが神の国の宣教を始められたとき、大勢の人びとが主イエスのもとに押し寄せてきました。主イエスはどんなに疲れていても、神さまとの交わりを求める一人ひとりとの対応をおろそかにされませんでした。同時に、今朝ご一緒に読んだところには、「ひとり」になる時間を大切にされた主イエスの姿が見えてきます。「ひとり人里離れた所」に身を隠し、「ひとり山に」登り、「ひとり」で過ごされる時間を、主イエスは大切にされたのでした。何のためでしょうか。神さまの前に「ひとり」、祈る時間を大切に切り分け、聖別するためです。

主イエスは「祈り」について、こう教えておられます。「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」(マタイ6・6)。

神さまは私たちの目に隠れています。「あそこにいる」「ここにいる」と神さまの存在を見つけることはできません。神さまは私たちの目に隠れています。その神さまと出会うために、私たちは神様の前に「ひとり、静まる」必要があるのです。なぜか。言葉で説明することはできません。ぜひ、体験してみてください。神さまの前に「ひとり」になるとき、そして聖書を開いて、主イエスの言葉に聴きたいと静まる時、私たちは不思議にも、見えない神さまと「つながる」恵みをいただきます。

かつてナチスのヒトラーと信仰的に闘ったボンヘッファー牧師は「一日の始まりと終わりは、自分の内側から出てくる言葉には沈黙させて、私たちの全生活が属する方の言葉に聴くのがよい」と語っています。主イエスも、私たちの全生活が属する方、神さまの言葉に聴いて、神さまとつながるために、「ひとり」、神さまに聴く静かな時を必要とされました。私たちよりもはるかに愛において深く、信仰において深い主イエスが「ひとり」、神さまと結びつく時間を必要とされたのです。

今朝、ご一緒に開いたマタイ 14 章 13 節と 22～23 節は、「五千人以上の人たちと五つのパンと二匹の魚を分かち合われた場面」の前後です。もともと主イエスは弟子たちからも離れて、人里離れた所で「ひとり」になろうとしておられました。どうしてでしょうか。実は直前に「ヘロデ王がバプテスマのヨハネに首をはねて処刑した」ことが主イエスに知らされています（1～12 節）。バプテスマのヨハネは何も犯罪を犯していません。ただ神さまの正しさをヘロデ王に語っただけ。けれども、そのヨハネが首をはねられてしまう。そんな不条理が堂々とまかり通る社会において、主イエスご自身も「死」を深く覚悟されたのかもしれませんが。とにかく「ひとり」になって、神さまの前に祈る時間の必要性を覚えられたのでしょう。

そこに五千人を超える人たちが押し寄せてきたのです。「ひとり」になりたかったであろうに、しかし、主イエスはその人々との交わりを大切にされます。そして、五千人を超える人たちと五つのパンと二匹の魚を分かち合う大きな恵みを体験した後で、弟子たちを強いて舟に乗せ、「ひとり」の時間をもたれたのでした。

神さまを求めてやまない人びととの「交わり」と、「ひとり」の時間の、両方を大切にされた主イエスの姿がここに見えてきます。

先ほどのボンヘッファー牧師はこうも語っています。「神の前にひとりになることを知らない者は、交わりの中に入ることを用心すべきであり、同時に交わりに生かされている自分を知らない者は、ひとりでいることを用心しなさい」と。これはどういう意味かと言うと、私たちが人と人との交わりを「共に生きる」ということと、神の前に「ひとり」になることは、車の両輪のように切っても切り離せないということでしょう。まさに主イエスは、人々との「交わり」を大切にすることこそ、「ひとり」の時を大切に必要とされたのでした。

新生讃美歌に『ひとりのひととき』（四九九番）という賛美歌があります。作詞者の島田富士子さんは浦和教会で長い間、信仰生活を送られた方ですけれども、会社の昼休みに近くの教会の庭で許可を得て過ごし、そこに咲く花々を見ながらひとり静かに黙想する時間を大切にされる中で、この賛美歌が生まれたそうです。

- 一 ひとりのひととき 静かです 見えないお方が 共に居て  
聖書（みふみ）をとおして 語られる み言（ことば）心に 響きます
- 三 ひとりのひととき 豊かです 信じるお方の 生命（いのち）受け  
世に勝つ力を 秘むように 春陽（はるひ）にタンポポ咲いてます

この詩を読んでいると、彼女を「静かに、豊かに」支えた主イエスの言葉、「世に勝つ力を秘めた命の言」の力が迫ってきます。また島田さんの弟さんで響者の T さんという方がおられるのですが、わたしが浦和教会にいた頃、土曜日の聖歌隊練習によく T さんが礼拝堂に来られて聖歌隊の賛美を「聴いて」おられました。耳は聞こえないのです。けれども T さんは確かに聖歌隊の賛美を「聴いて」おられました。わたしは、この T さんの姿を思い出すたびに背筋を伸ばらせられる思いがします。神さまの言葉は聞こえませんが、私たちが主イエスの声を聴きたいと願い、その前に自分を整えて立つとき、確かに「聴こえてくる」のです。

主イエスを支え、主イエスに従う者たちを「静かに、豊かに」支えて来た命の言、「世に勝つ力を秘めた命の言」に、私達も聴いていきたいのです。